

# 佐藤春夫『女誠扇綺譚』論

— 植民地の新聞記者と読書人を視座として —

宮内 淳子  
福島 理子

## 一 佐藤春夫「女誠扇綺譚」と台湾の新聞メディア

宮内 淳子

### はじめに

佐藤春夫「女誠扇綺譚」(『女性』一九二五年五月)は、彼が一九二〇年七月六日から一〇月一五日まで台湾に滞在した体験から生まれた。他にも、この旅に取材したものに、「魔島」(『中央公論』一九二三年一〇月)、「旅びと」(『新潮』一九二四年六月)、「霧社」(『改造』一九二五年三月)、「殖民地の旅」(『中央公論』一九三二年九・一〇月)などがある。

旅の途中には高雄から厦門へ渡り、そこで着想を得た「星」(『改造』一九二二年三月)や紀行文「集美学校」(『新潮』一九二二年九月)、「厦門の印象」(『野依雑誌』一九二二年一月)なども発表し

ている。これらは、総じて台湾に取材したもののより発表が早い。「星」は、中国の民間物語「陳三五娘」を素材にしたもので、前半は「黄五娘」の題名で『改造』の一九二二年一月号に発表されており、帰国して間もなくの執筆であった。それに比して「女誠扇綺譚」は帰国してから五年、「殖民地の旅」は二一年という時間を発表までに要している。

河原功は「佐藤春夫「殖民地の旅」の真相」(『台湾新文学運動の展開』研文出版、一九九七年)で、発表に慎重にならざるを得なかった台湾情勢を指摘し、藤井省三は、「植民地台湾へのまなざし—佐藤春夫「女誠扇綺譚」をめぐる—」(『日本文学』一九九三年一月)において、「女誠扇綺譚」を単なるエキゾチシズムの文学とする従来の評価に対し、「佐藤が台湾ナショナリズムに示した強い関心と共感は一顧だにされない」と批判した。河野龍也「佐藤春夫「女誠扇綺譚」論 或る〈下婢〉の死まで」(『日本近代文学』二〇

○六年一月)では、事件に遭遇した語り手が、これについて世外民と話し合ったりすることを通して、それまでのストレンジャーから変化し、「結末にいるのは、植民地の現実に関わつてしまつた(私)であり、支配者の立場から殖民地について語ることの決定的な無力さと限界を探り当てた、現在の語り手自身なのである」とする。

このように近年の「女誠扇綺譚」論には、佐藤春夫が植民地台湾の置かれた現状を受け止めていた、という認識が示されており、各論考とも説得力を持っている。

小論では語り手の「私」を新聞記者に設定したことに注目し、こうした見方を別の角度から再確認してみたい。再録本『霧社』(昭森社、一九三六年七月)では、「女誠扇綺譚」の末尾の一節に、「それが原になつて自分は僚友と争論の末退社し、食ひつめて内地へ帰つて来た。」と書き加えられている。それまでも本文には、「私」の新聞社勤務への倦厭の情はしばしば吐露されていた。真面目に出来ていた新聞社勤務が、今は出来なくなつてしまつたという設定から、作者の、植民地台湾における新聞批判が読み取れはしないか。実際に佐藤春夫が関係を持ったと思われる台湾新聞社を取り上げ、これを参考にしつつ、考察を加えてみたい。

これらは、現地で得た認識を背景に生れた。旅を通して、彼は現地の新聞報道を鵜呑みにできないことを再認識したであろう。たとえば彼の滞在時、霧社の奥地に住む「サラマオ蕃」が蜂起した事件

(一九二〇年九月一八日)があり、それは「魔鳥」「霧社」に描かれた訳だが、台湾の先住民を調査した森丙牛から情報を得ていた佐藤春夫は、新聞がもつぱら日本人被害者の側からしか報道しなかつたにもかかわらず、台湾総督府の先住民政策を批判的に見る視点を持ち得た<sup>1)</sup>。

佐藤春夫「厦門の印象」では、厦門の旅館で寝具の下に豚の骨を置かれ、日本人とみでの宿の者のした嫌がらせだろうと考えている。また、「つい昨日散歩の路上であの町はづれの壁に見出した落書のことを考へる。「青島問題普天共憤」「勿忘国恥」といふのがあつた。一日貨排斥のものとしては「勿用仇貨」「禁用劣貨」などもあつた。「こ奴は日本人だ!」といふやうなことを言ひながら私につつかかつて来た酔漢もあつた」ともある。「青島問題」とは二十一条要求(一九一五年)が一九一九年のパリ講和会議で事実上認められたことを指している。その後中国では激しい抵抗が起き、抗日運動が展開されていた。その上、福建省では抗日活動をしていた中国人学生に日本人と台湾人が暴行したことから起きた福州事件が、一九一九年一二月にあつたばかりだった。

厦門でこうした体験をした佐藤春夫だったが、その翌年、自宅に中国人留学生、田漢の訪問を受ける。

田漢の日記「薔薇之路」(泰東図書局、一九二二年五月)によると、田漢は一九二二年一〇月一六日、上目黒の佐藤春夫宅を訪ねた。初対面のぎこちなさを和らげたのは、佐藤の「黄五娘」(「改

造』一九二一年一月、後に「星」として『幻燈』（新潮社、一九二一年一〇月）に収録）の話題であった。「厦門の印象」も、その後、話題に上ったはずである。古い中国の説話を抒情的に描いた「星」に比べ、「女誠扇綺譚」には植民地が持つ問題が反映されていたが、厦門で肌で感じた抗日運動を、田漢を通して中国側の立場から理解する機会もあったのではないかと思われる。<sup>2)</sup>

「女誠扇綺譚」は当然ながら日本語で書かれたテキストだが、作中の話しことばは、日本語の他、英語、閩南語があり、穀物問屋の店先の鸚鵡が北京語を話す。先住民のいる島に、大陸から移民が繰り返され、やがて日本の統治を受けるようになったこの島の、政治的、文化的背景がことばに張り付いている。「女誠扇綺譚」では、これらの事情に配慮した書き方をしている。これも現地で再認識したことであろう。話しことばのみならず、世外民が作る漢詩も、台湾が置かれた状況を背景にして考えれば、このジャンルが持つ政治的意味合いが容易に浮かび上がる。世外民と「私」が交遊を結んだのは、新聞に投稿された漢詩が縁であった。台湾において新聞投稿欄における漢詩の位置がどのようなものだったかについても言及したい。

### 植民地の新聞事業——『台湾新聞』を通して——

松風子「『女誠扇綺譚』の話者について」(『文芸台湾』一九四〇

年一〇月)は、「佐藤春夫氏は台湾で新聞記者をしてゐたことがあるさうだ。さういふ噂をときどき聞かされる。かういふ流説の出で来るもとは、『女誠扇綺譚』の中で、この物語の話者が台南の新聞記者をしてゐたといふ記事があるところに基いてゐるものらしい」と始まる。松風子とは、台北帝国大学教授であった島田謹二のペンネームである。

小説中の語り手と作者佐藤春夫を混同したについては、本文にある「その頃の私は、つまらない話だが或る失恋事件によつて自暴自棄に墮入つて」いたというのが、当時の佐藤春夫の状況と結びつけたせいかもしれない。島田は、それだけでなく、「女誠扇綺譚」の「私」に春夫の体験が何らかの影響を与えていると推測し、伝手を頼つて知人から佐藤春夫に問い合わせしてもらつたという。その結果、春夫からは「台南新報から頼まれ、金を貰つて何か書く約束をした」が、「二回位何か書いて、後は書かなかつたやうに思ふ」、しかも金は「相当貰つた」という回答があった。そして、こうした新聞社との遣り取りから、語り手を新聞記者にすることを思いついたのだろう、と島田は推測している。

ここでは、佐藤春夫に原稿依頼をしたのが『台南新報』ということになっているが、佐藤春夫が高雄から父親に出した書簡には、「ちよつと支那まで渡つて見ます。——旅費は台湾の印象といふ文章を台湾新聞に書け——一枚二円五十銭出すといふから、前金をもらつて行きます」(佐藤豊太郎宛、一九二〇年七月一日)とある。ど

ちらかが春夫の記憶違いか、または、『台南新報』説が伝聞のどこかの段階での誤りだったか——。また、先の父親宛書簡には、「台中の新聞などで大分大げさに書き立てられたのには却つて迷惑をしました」という一節がある。台中の新聞というなら、台中唯一の日本人経営の新聞である『台湾新聞』を指すだろう。これらは、当時の『台湾新聞』か『台南新報』が残っていれば確認できるのであるが、現在のところ見る事ができない<sup>3)</sup>。

「女誠扇綺譚」の「私」を新聞記者と設定したについて、仮に、前金をもらった『台湾新聞』をモデルにしたとして、具体的な当時の新聞社の状況を照らし合わせてみよう。

『台湾新聞』は、『台湾日日新報』『台南新報』とともに、当時、台湾の邦字新聞として勢力を分け合っていた。国勢新聞社編『昭和十一年版 台湾新聞総覧』（国勢新聞社台湾支社、一九三六年七月）の「台湾新聞社」の項目によると、本社は台中市明治町一ノ五、創業は明治三四（一九〇一）年である。はじめは『台中毎日新聞』、二年後に『中部台湾日報』、一九〇七年に『台湾新聞』となった。順調に部数を伸ばし、一九一八年には煉瓦造りの二階建ての工場を増築して輪転機を設置し、六頁の紙面を八頁に増やした。春夫の滞在から五年後の一九二五年には、夕刊四頁の発行も始まった。一九二七年五月より、月曜日毎に「付録新竹版」、一九三一年四月からは火曜日毎に「付録高雄版」が発行された。

小説中の「私」は新聞社勤めに後ろ向きな姿勢しか持てなくなっ

ており、ケントウカン 禿頭港の廢屋での不思議な体験をした後で、次のように思っている。

これが若し私が入社した当時のやうな熱心な新聞記者だったら、趣味的ないい特種でも拾つた氣になつて、早速「廢港口— マンス」とか何とか割註をして、さぞセンセーショナルな文字を羅列することを胸中に企ててゐたらうが、その頃は私も自分の新聞を上等にしてやらうなどといふ考へは毛頭なかつた。毎日の出社さへ満足には勤めずにわが酒徒世外民とばかり飲み暮らしてゐた。

仕事をする氣になれずに飲み暮らしていたについては、先にもあげた失恋事件が原因のひとつと考えられるが、新聞社のあり方が、「私」を失望させた可能性もある。それは次のような、世外民との出会いの経緯にも示されていた。

彼の投稿したのを見て私はそれを新聞に採録した。私は彼の詩——無論、漢詩であるが、その文才を十分解したといふわけではないが、寧ろその反抗の氣概を喜んだのである。しかし、その詩は一度採録したきりだつた。当局から注意があつて、私は呼び出されて統治上有害だと言ふのでその非常識を咎められた。

当局からの指示に従って統治に協力しなくてはならないについては、一九一七年二月一八日に発令された「台湾新聞紙令」の力が大きい。これはおおむね内地の新聞紙法（一九〇九年公布・施行）に則り、たとえば「第十一条 左ノ事項ハ新聞紙ニ掲載スルコトヲ得ズ」として禁止条項が並び、更に、「第十二条 台湾総督ハ外交軍事其ノ他秘密ヲ要スル事項ノ掲載ヲ禁止スルコトヲ得」といった事項もある。李承機「植民地統治初期における台湾総督府メディア政策の確立―植民地政権と母国民間人の葛藤」（『日本台湾学会報』二〇〇二年七月）によると、「台湾総督府は、内地とは異なったメディア政策を敷くことよって、内地よりも厳しいメディア統制を行っていった」「その最も具体的な施策は「御用新聞」の創設と、統制色が内地よりも強い「台湾新聞紙条例」の制定であった」としている。「台湾新聞紙条例」は「台湾新聞紙令」の前身で、一九〇〇年一月に発布され、その「御用新聞」となったのが、先にあげた『台湾日日新報』『台湾新聞』『台南新報』の三紙であった。

当時でも、城東生「余の見たる台湾の日刊新聞」（『実業之台湾』一九二五年一月）が、「余は台日、台湾、台南の三新聞を読むこと既に十数年の久しきに及ぶものであるが未だ嘗つて三新聞が督府の施政に対して直言讜議を試みたることを見たことも、聞いたこともないのである」「而かも三十年の間督府の施政が凡て瑕瑾無かつたと思へぬ」といった批判をしている。総督府の方針は台日、台湾、台南の他に日刊新聞の発行は許可しないということなので、こ

れは間接に三新聞を保護する結果になっているのだ、という。そうしてみれば、「反抗の気概」を持った世外民の漢詩を採録した「女誠扇綺譚」の「私」に対する、「当局から注意があつて、私は呼び出されて統治上有害だと言ふのでその非常識を咎められた」という新聞社の措置は当たり前すぎるほどのものだった。城東生が、主要三紙は補助金を受けているわけでもないのに総督府の方針には一切批判をしない御用新聞だと批判しているのを見ると、民間紙には条例をすり抜けて批判的な記事を書くものもあつたのだろう。「私」もまた、御用新聞のあり方にやりきれないものを感じていた。

「女誠扇綺譚」末尾にも、新聞が植民地を統治する側に即した記事ばかり書いている不満が示される。

幾日目かで社へ出てみると、同僚の一人が警察から採つて来た種のなかに、穀商黄氏の下婢十七になる女が主人の世話した内地人に嫁することを嫌つて、罌粟の実を多量に食つて死んだといふのがあつた。彼女は幼くて孤児になり、この隣人に拾はれて養育されてゐたのだといふ。この記事を書く男は、台湾人が内地人に嫁することを嫌つたといふところに焦点を置いて、それが不都合であるかの如き口吻の記事を作つてゐた。

先に触れた通り、『霧社』収録時には、右の引用部分のすぐ後に、これを耐えがたく思った「自分」が「僚友と争論の末退社し」、内

地に戻るということを書き加えている。

次に、当時の具体的な『台湾新聞』の記者の現実を調べてみよう。

泉風浪『新聞人雑記』（台湾婦人社、一九四〇年七月）は、二一歳で東京で新聞記者を始めてからの、二七年余りの記者生活を回顧したものである。泉は一九一九年九月に台湾へ来て、台湾新聞社の記者となり、一九二二年、台湾新聞社の改革運動を起こして誠首される。その後、台南新報社に入社したが、佐藤春夫が台湾に滞在していた時期は台湾新聞社にいた。

『新聞人雑記』の中で入社当時の『台湾新聞』のことを、泉は次のように回想している。

俺が東京から雇はれて来た当時は八千五六百を上下してゐた。どうしても一万以上出さなくてはと言つて、編集、営業共に大馬力をかけたものであつた。殊に主筆の大野恭平氏は、よりよい新聞を作らねばと云つた意気込みで、編集費用を惜まず、ドシドシと支出したので、謂ふ処のよい新聞は出来上るが、編集費用は嵩む一方であつた。

佐藤春夫に好条件で原稿を依頼したのが『台湾新聞』だとすれば、この大野が主筆だった時代である。

吉川生「台湾改革の第一歩 組上の台湾三新聞」（『実業之台湾』

一九二〇年一二月）では、冒頭で、「台湾を観察するものは、衆口共に官場の不振：御用商人の跳梁：而して日刊新聞紙の不甲斐なきを難せざる者なし」「我輩は台湾改革の第一歩は、実に新聞紙の改造にありと信ずる」とし、改造の要点に、まず新聞記者の待遇を改善して生活を安定させ、見識を持たせること、及び組織の充実を挙げている。新聞の改革においては金力以上に人の力が大きいという趣旨である。台湾新聞社については、「此大発展を事実上に出せしめたる者は大野恭平」であると評価し、台湾新聞社社長が内地から『国民新聞』の宮島真之を呼んだことで、台北支局長の宮川次郎や主筆の大野恭平らがどう動くかという興味が語られている。

結果として、大野主筆は退任。宮島真之と一緒に連れてきた佐藤夜午を台北支局長に据えたので、宮川も退社することになる。一九二二年は台湾新聞二〇周年を記念する年だが、佐藤春夫が台湾に行った時期、それを目前に組織は大揉めだったわけである。内紛に巻き込まれて退社した宮川次郎が後年、その著書『新台湾の人々』（拓殖通信社、一九二六年三月）中で、台湾新聞社社長以下の経営陣を辛口に評価していたのも無理のないことであつた。

### 漢詩の位置

「私」が世外民の漢詩を採録したことから、二人の交友は始まった。新聞に投稿される漢詩とは、どのようなものだったか。

たとえば『台湾日日新報』一九二六年一月三日（明治節）には、「奉祝漢詩」として、大正天皇即位（一九一五年一月）を祝う漢詩が、「奉祝和歌」とともに多数並んでいる。漢詩という中国の伝統文学のスタイルで日本の皇室を讃える。作者は、一部日本人名も確認できるが、多くは漢民族の名前である。それに対し「奉祝和歌」は日本人名ばかりである。

台湾の日本統治期において、最初に文化政策を通しての懐柔に漢詩文を取り上げたのは、第四代台湾総督・児玉源太郎であった。この流れで一九〇二年に台中に樸社、一九〇九年には台北に瀛社、台南に南社が生れて三大詩社とされ、一九二一年一〇月に瀛社主催で全島詩人大会が台北で開かれた。漢詩文の素養を持った日本人たちが、それを通じて台湾の知識人たちと交遊し、関係を深めようとする催しもあったが、一方、漢詩文は台湾在住の漢民族たちに文化的アイデンティティを自覚させるものであった。しかも、日本の知識階級が信奉してきた漢詩文は、自らの文化なのである。世外民は別に臨んで「私」へ漢詩を送った（初出時にはなく、『女誠扇綺譚』（第一書房、一九二六年二月）刊行時に書き加えられる）。それも、こうした交流の私的なかたちといえる。

清朝が終るまでは台湾でも科挙が実施されており、世外民は代々秀才を出した豪家の出だというから漢民族のエリートである。日本もかつては漢詩文をエリート層の文化として持っていた。世外民の漢詩の「その反抗の気概」を評価する「私」も、「統治上有害だ」

と判断した当局も、漢詩文を解し、その影響力を信じられた層に属する。

台湾旅行に取材した佐藤春夫の紀行文に「殖民地の旅」がある。先にあげた父親宛書簡に、「台中の新聞などで大分大げさに書き立てられたには却つて迷惑をしました」という一節があったが、それは、「殖民地の旅」にあった台中の林猷堂（文中では林熊徴）訪問についてではなかったか、との推測も可能だ。このとき林猷堂は、日本の植民地政策として平等を取るのか、同化を取るのかという問題に関して、次のように語っている。

本島人に向つて内地人に同化せよと強要するならばこれは本島人は容易に認め得ないところでありませう。何となれば、人間は本来の性質として向上心を持つてゐる者であります。本島人は既に自ら文明人なりとの自負を持つてゐる。さうして忌憚なく申せば台湾に来てゐる一般の役人や商人などの文明よりも高い文明を持つてゐると自負してゐる。その彼らが自分の高い自負を捨ててより低い文明に同化することは人間の本性として肯ぜぬところであります。

「殖民地の旅」は実際の台湾旅行から一二年も経ってから発表されたものであり、この意見が佐藤春夫の内部に深く刻まれていたことがわかる。これはそのまま世外民が漢詩を創作する動機にも繋が

つてくる。林猷堂の自負する漢民族の高い文化のひとつに漢詩文があるのは、動かせない事実である。

台中霧峰の樸社の発起人の一人、林痴仙は林猷堂の従兄であり、所属の詩人たちの多くは、一九二一年に結成された台湾文化協会に参加している。これは、台湾人の文化活動を活発化させ、台湾議会設置請願運動にも関わった組織である。漢詩を通じて連帯感と抗日意識が共有されたことがわかる（「台湾総督と漢詩人」、中島利郎編著『日本統治期台湾文学小辞典』、緑蔭書房、二〇〇五年）。

先に泉風浪『新聞人雑記』を紹介したが、この「俺の政治運動」の章には、「俺は社会運動をする事、内台通じて二十有五年、つまり新聞人が本職か社会運動の方が専門か判らない程、東京でも台湾でも社会運動に没頭したものである」とある。また、「大正十一年一月二日開催した全島詩人大会の開催を斡旋したのも俺である。のみならず同大会に於て「芸術と文化運動」と云ふ演題で台湾の文化促進を極力強調したのも俺である。（中略）台湾新聞主催の全島かるた大会を企てたのも、俺と南報社部長だった伊藤杏堂君とである。例の台湾議会請願運動に対しても俺は陰に陽に骨を折つてゐる」という。全島詩人大会から台湾議会請願運動まで、幅広く運動を行ったというのである。

台湾議会設置運動は、帝国議会両院に対し、第一回の請願運動が一九二一年一月三〇日に行われ、一九三四年三月まで一五回に及んだ。この運動の中心に林猷堂がいた。「殖民地の旅」で、佐藤春夫

が林猷堂を訪ねたとき、その席に警察の役人が立ち合い、会話の内容をしきりにメモしていたとある。その警戒ぶりから、春夫は自分がどのような人物と相対しているのかを察知できた。この林氏と会うことを勧めてくれたのが、州知事の晩餐会で出会った新聞記者のB君だとある。台中州の知事の会で会った、「土地の有力な新聞記者のB氏」といえば、台湾新聞社の記者であることは推測できる。B氏は林猷堂のことを、「もし仮りに台湾共和国といふやうなものでも成立すると空想してみても、その時の大統領はと言へば正しく彼」と言い切った。文中ではその名を林熊徴というが、阿罩霧に住んでいるということからも、これは林猷堂に間違いはない<sup>④</sup>。林熊徴はおなじく名家には違いないが、林本源製糖の副社長として、総督府に近い立場だった<sup>⑤</sup>。

全島詩人大会に『台湾新聞』がどうかかわったか不明であるが、樸社のある台中が『台湾新聞』のある地なので、何らかの連携があったかもしれない。

残されている『台湾日日新報』を調べてみる。一九二四年二月七日の七面には、漢詩人大会が台中で開催されると報じ、一九二七年五月九日（夕刊）一面には、「全島漢詩人大会を台北に開催」とし、「全島の漢詩人は台北、台中及び台南の三市に於て毎年一回大会を開催して来たが、本年はいよいよ台北市で開くこととなり、二十日蓬萊閣に開催」と報じている。これは第一代台湾総督・上山満之進によって開催された。

日本語版での漢詩投稿欄は「奉祝漢詩」以降、徐々に縮小されていったが、『台湾新聞』の華字版では、たとえば一九三五年四月六日六面には、「藝苑消息」として「彰化崇文社第二百十二期文題及第七期詩題擬定如左」とあって題が並んでいる。これによって漢詩文を作り、発表するのである。こうした通知は、華字版にはしばらく続く。

### 何語で話すのか

世外民は漢民族のエリートとして漢詩を作ったが、「女誠扇綺譚」には書き言葉だけでなく、台湾で話されるさまざまなことばがあった。ルビも、閩南語は「龍眼肉」、「玉葉仔」など多数あり、また北京語の「汝來仔請坐」、英語の「無関心者」などがある。廢屋で聞いた女の声は、「×××××、×××××！」と書かれる。世外民は「×××！」と女の声に応えたが、「××」の表記は、語り手の「私」がまったく聞き取れなかったことを示す。世外民は、女は泉州語で話しており、自分にもはっきりわからないという。この「××」以外は、みな日本語に直されているが、その中では日本語の他に、北京語、閩南語、英語といったことばが層を成し、それぞれに文化的背景や当時の国際関係、また島内の階級といったものが張り付いている。

河原功『台湾新文学運動の展開 日本文学との接点』（研文出版、

一九九七年）には、一九三〇、三一年に起きた台湾の郷土文学論争が紹介されている。どのことばにアイデンティティを求めるかが模索されていた。

台湾新文学運動は、つまるところ中国白話文による文芸工作の推進だと言えるが、それが台湾なるが故に、中国本土の場合に比べて深刻な問題をかかえていた。つまり、台湾の言語は、閩南語系統ではあるが、大陸のそれとも幾分相違したものであった。同じ中国語でありながら、北京語とは著しく異なっており、外国語と言ってもよいくらいの隔たりがある。いくら北京白話文を普及したところで、台湾語との溝を埋めることには無理があった。北京白話文は、台湾語ほどにはどうしても大衆化されないのであった。

世外民と「私」は、何語で話しているのだろうか。日本語か、英語か？「廈門の印象」によれば、台湾の打狗（高雄）から廈門へ渡ったとき、春夫は案内役をしてくれた鄭享綬と英語で話している。彼は日本語を解さなかった。先にも取り上げた高雄から父親宛に出した手紙の中で、春夫はこの青年について、「東君の助手に支那廈門産れの青年が居て、彼は甚だ流暢に英語を話す上に、兄が当地支那人中有数の商人とかにて、台湾人支那人の上流に可なりの交際あるらしく、その青年がいろいろと案内をしてくれるのでなかなか便利

です」とある。知識階級の人とは、英語が一番簡単なコミュニケーションの手段だったようだが、春夫には日本語のわかる案内人がつく時もあった。

「私」は、禿頭港の廢屋で若い男が縊死したと報道されたとき、それを夢に見て知らせたという穀物問屋の娘に会おうとする。会えば、廢屋で聞いた女の声の正体がわかると踏んだのである。未知の若い女性に会おうというとき、役に立つのが新聞記者という肩書であった。穀物商は「台湾人の相当な商人によくある奴で内地人つきあふことが好き」らしく、世外民とは対照的な人物であった。だから、穀物商の娘も「思ひがけなくも娘は日本語で、それも流麗な口調で」話すのであった。

廢屋で聞いたのは、泉州語だった。沈家の話をしてくれる老女は、北京語ではなく閩南語で話していたのではないかと思うが、「私」はほぼ聞き取っている。「私」は、「普通に、この島で用ひられるのは廈門の言葉で、それならば私も三年ここに住んでゐる間に多少覚えてゐた」ということなので、「彼女はよほど話好きと見えて、また上手でもある。ただ小さい声で早口で、それが私にとつては外国語だけに聴きとりにくい場合や、判らない言葉などもある。私は後に世外民にも改めて聞き返したり」しながら、老女の話をもとめている。しかし、泉州語も閩南語の一方言で、実は廈門のことばとそれほどかけ離れていない。福建省からの移民が用いた閩南語に、泉州や漳州の方言が分類されるということだ。だから、当時の

台湾において閩南語は漢民族の多くが用いるもので、しかもこのうち泉州語を話す人の割合は少なくなかった。<sup>6)</sup>

「女誠扇綺譚」の世界だけで見ても、漢民族の知識階級が自民族のプライドを賭けて漢詩を作る一方、彼らのうち若い世代は英語が話せるし、統治する日本側に近づいて富や利権、便宜を得ようとする人々は日本語を使う。一方、民衆は閩南語しか使えない。台湾において、ことばは出自や階級を明らかにするものでもあった。佐藤春夫はそのことに意識的であったからこそ、「聞き取れない泉州語」にこの女性の地位を託したが、廈門語と泉州語は共に閩南語として括られている事実には思い至らなかったということだろう。作中において、泉州語を使う使用人の女性の最期は、社会的地位や性差による台湾内部の階層を顕在化させる<sup>7)</sup>。このような弱者の死の背景にあるものを追及もできず、ただ内地人に嫁するのを嫌ったことを不都合と責める記事しか書けないなら、新聞は当局が敷いた路線を辿るだけのメディアに過ぎない。『霧社』収録時には、それを批判して「私」が新聞社を退社するに至ったことが書き加えられたが、それがなくても、「私」が長くここに留まらないだろうことは推測し得る。

台湾総督府は統治を始めて間もなく、国語伝習所や公学校を通じて日本語の普及を計っていた。そして一九三七年四月には、報道において漢文（中国語）の使用ができなくなった。漢文欄の廢止は、軍部の強い圧力があって日本人経営の新聞から始まり、徐々に雑誌

にまで及んだ。漢文使用の雑誌は、次々廃刊に追い込まれたのである。陳芳明『台湾新文学史 上』（東方書店、二〇一五年十二月）第七章の「訳注」には、「漢文（中国語）欄の廃止は、台湾総督府の「府令」による強制的命令ではなく、新聞社各社の協議による自主規制という形がとられた。四月一日付で漢文欄を廃止したのは日本人経営の『台湾日日新報』『台湾新聞』『台南新報』の日刊三紙で、台湾人経営の『台湾新民報』は六月一日より廃止している」とある。ここでも、主要三紙は総督府の意向を汲む措置を率先して行っていた。一九三七年から一九四一年という短期間に、日本語理解者は三七・八パーセントから五七パーセントまで増えている<sup>8</sup>。日本語を解しない人々は、紙面からの情報が得にくくなってしまった。郷土文学への模索は、ここでいったん断ち切られる。

## まとめ

「私」は新聞社勤務を通じて世外民と知り合い、廃屋の事件に関しては、その肩書を使って比較的簡単に穀物問屋の娘にも面会できた。そして、廃屋での見聞に端を発した出来事が単なるミステリーに止まらず、当時の台湾が置かれた状況と密接に絡んだものであることを知り得た。しかし、「私」が知り得たことは新聞記事にはならなかった。当時、台湾の新聞が置かれた状況を調べてみれば、内地以上に当局と癒着せざるを得なかった実情があった。まして事件

の当事者は、下婢という弱い立場の女性である。事件に関してなされた報道は、植民地統治者側の一方的な内容でしかなかった。その経緯を知っている「私」は、それまで以上に新聞社勤務の無力感や息苦しさに苛まれた。また、世外民と知り合う機縁を作った漢詩は、当初、日本人と漢民族の間を繋ぐものと意識されたが、植民地支配の力関係を隠蔽するには至らず、漢民族の側はここに自文化の誇りを置こうとし、日本側はこれを抑えようとし始める。「女誠扇綺譚」は、植民地の新聞記者を視点とすることで、当地におけることばの政治性を浮き彫りにしたのである。泉州語を話す女性の悲運は、その中で捉えられていたのだ。

## 二 白話文運動前夜の読書人

福島 理子

## はじめに

台南市の西はずれにある安平の廢港。語り手の「私」と友人の世外民は、その禿頭港の廢屋で聴こえるはずのない女の声を聴いた。廢屋にまつわる忌まわしい物語を知る老婆は、彼らにその声は「死靈の声」だと告げる。世外民はこの「廢屋に対して心から怪異の思ひ」を抱くが、「私」の方は、若い女が恋人と愛し合うために隠れて待っていたというのが真相で、そこには「何の怪異もない」と判断する。二人は廢屋を再訪し、確かにこの廢屋に入った者の跡があ

るのを確認する。さらに、エピロオグで、裕福な穀物商、黄家の娘に仕える下婢が、くだんの逢曳あひびきの女であったことが明らかになる。

つまりこれは、あたかも幽霊話のように語られつつ、主人公の合理的な解釈によって、実は幽霊話ではないことが暴かれていく物語なのだが、そうでありながらもなお、幽霊話であるようなあいまいさを、敢えて残しているところに妖しさがある。

作品一篇に漂う妖気は、祖先の悪行とそれが引き起こした実家の没落によって、フィアンセに捨てられ、発狂したまま死屍となったという女の情念に他ならない。祖先の悪行が家の没落を呼ぶという展開がもう因縁話めいているが、幸福を奪われた女の遺恨がここかしこに染みのようにこびりつき、それが何とも気色の悪さと哀れさを醸している。

作中には、離れて行ってしまった男を待ち続ける女の、悲痛な思いを示すコードがかけられている。そしてそれらのコードは漢文脈において了解されるものであって、そのコードを開いていくのは世外民という名の台湾の読書人である。

### 扇のメタファー

タイトルに言う「女誠扇」とは『女誠』の句の記された「扇」である。

『女誠』は、清代に女性の学ぶべき道德書としてまとめられた

『女四書』—『女誠』『女論語』『内訓』『女範』—の一つで、後漢の

曹大家こと班昭によって著された。世外民が教えた「専心」の章は、女性が二夫に見えるべきではない、また、妻は一生夫を喜ばせることだけを思っ生きていくべきだという内容が記されており、それを、新しい人生を求める道も鎖され、無垢な花嫁姿のまま許嫁が戻るのを待ち続けた娘の悲劇にからませているのは言うまでもない。ただ、その「専心」の文言が記されたのが「扇」であることにも留意する必要がある。なぜなら、「扇」という語は文学においてしばしば「秋扇」、すなわち夫の愛を失った女性のメタファーとして用いられてきたからである。もとは、漢の成帝の妃であった班婕妤の故事。彼女は美しいばかりでなく聡明な女性で、成帝に愛されていた。しかし、後宮に新しく趙飛燕姉妹が入ってくると、艶冶な姉妹に魅入られた帝が班婕妤のもとを訪れることはなくなる。失意の班婕妤は自ら後宮を退き、皇太后の住む長信宮に仕えて、残りの人生を終えた。彼女がその無念を託したというのが次の詩である。

### 怨歌行

班婕妤

新裂齊紈素 新たに齊の紈素を裂けば

皓潔如霜雪 皓潔なること 霜雪の如し

裁為合歡扇 裁ちて合歡の扇と為せば

团团似明月 团团として 明月に似たり

出入君懷袖 君が懷袖に出入し

動揺微風発 動揺すれば 微風発る

常恐秋節至 常に恐る 秋節至り

涼颯奪炎熱 涼颯 炎熱を奪ひ

棄捐篋笥中 篋笥の中に棄捐せられて

恩情中道絶 恩情 中道に絶えんことを

齊の国で織られた、雪か霜かと思まがうほどの白い絹。切りとって張り合わせるに月のようにまん丸い団扇に。あなたの胸や袖の中に入りし、揺れてそよ風を送っていました。でも、秋が訪れ涼しい風が暑さを奪って行ったら、箱の中に放り込まれたままになつてしまふのではないか、あなたの情けも途切れてしまふのではないかと、ずっとそればかりを恐れていたのです。

秋になると用済みとなる団扇を、帝に見捨てられたわが身にたとえる表現の巧みさと哀切さで、班婕妤の名を史上に留めさせた詩である。

第四句に「团团として 明月に似たり」というように、本来この詩に詠われる扇は「団扇」すなわち丸いうちわである。しかし、日本においては、「秋扇」は扇子のイメージで受け継がれた。世阿弥作の謡曲『班女』はまさしく、この班婕妤の詩に想を得て作られたものである。愛の証として、花子と吉田の少将とで取り交わした扇が、久しく待ち続ける花子の心を狂わせた。

わが待つ人よりの、おとづれをいつ聞かまし

(『班女』)

いつまでも帰ってこない恋人を待ちわびて、物狂いとなった花子の姿は、『女誠扇綺譚』の陰のヒロイン——実家が破産したために縁談を破られ、気が狂ってもなお許嫁の訪れを待ち続けていたという沈家の娘——に重なる。さらにまた、『班女』では、

翠帳紅閨に、枕並ぶる床の上、馴れし衾ふとんの夜すがらも、同穴の跡夢もなし……せめてもの、形見の扇手に触れて、風の便りと思へども

(『班女』)

と、扇が失われた愛の形見として機能しているが、『女誠扇綺譚』の最後に登場するもう一人の女にとって、扇はまさしく愛の形見であった。

ただあなたが拾つておいでになつたその扇——蓮の花の扇を私に下さい。その代りには何でもみんな申します……

私のでもありませんが……ただ私の思ひ出ではありません。

廢屋で逢曳をしていた女は、富裕な商家黄氏の娘に仕える下婢であつたのだが、彼女に縁談が起つたため、その恋人は例の廢屋で

首をくくって死んでしまった。彼女ははかない恋の形見として、その扇を求めたのである。

興味深いのは、来るはずのない夫を待ち続けた沈家の娘にとってその扇は、『女誠』の扇であったが、逢曳の女がそれを「蓮の花の扇」と言い換えていることである。

その女持の扇子といふのは親骨は象牙で、そこへもつて来て水仙が薄肉で彫つてある。その花と蕾との部分は透彫になつてゐる。それだけでも立派な細工らしいのに、開けてみると甚だ凝つたものであつた。表には殆んど一面に紅白の蓮を描いてゐる。裏は象牙の骨が見えて——表一枚だけしか紙を貼つてゐないので、裏からは骨があらはれるやうに出来てゐたのだが、その象牙の骨の上には金泥で何か文章が書いてある。……世外民は扇のうら返して見て、口のなかで読みつづけながら「おや、これは曹大家の女誠の一節か。専心章だから、なるほど、不蔓不枝を扱んだかな……」

女誠の文章が刻まれているのは、象牙でできた扇の骨の部分で、表の紙には蓮が書かれているのであるから（しかも親骨には水仙が彫られている）、「蓮の扇」と呼ばれてしかるべき品であるのだが、この作品では標題がそうであるように「女誠扇」と呼ばれ、逢曳の女だけが「蓮の花の扇」と呼ぶ。

蓮が描かれていたのは、宋代の周敦頤が「愛蓮説」という文章で蓮の花を

出淤泥而不染、濯清漣而不妖、中通外直、不蔓、不枝、香遠益清、亭亭淨植、可遠觀而不可褻翫焉（淤泥より出て染まらず、清漣に濯はれて妖ならず、中通じ外直く、蔓あらず枝あらず、香遠くして益ます清く、亭亭として淨く植ち、遠く觀るべくして褻翫すべからず）

泥の中から生えているのに汚れなく、清いさざなみに洗われて婀娜なところがなく、まっすぐな茎の中が通るように物事に通じ、蔓や枝を伸ばさぬさまは一途さを表す。遠くまでその清らかな香りをただよわせて、すつくと立ち、遠くから眺めるべきであつて手を出すべきではないもの——清純なものとしてたたえたからである。繁榮を妨げるような「不蔓不枝」の語が画賛として添えられているのは、一途な操として用いられるがゆえに『女誠』の「専心」と通ずるのだと、世外民が読みといたように、蓮は、純潔の象徴として描かれていたのであるが、一方で蓮には恋のイメージが濃厚に伴う。蓮の発音が「憐」恋を連想させることや、漢代から「採蓮曲」と題する蓮つみの歌が恋歌として作られた伝統に起因するのである<sup>9)</sup>。

逢曳の女がその扇を「蓮の花の扇」と呼んだのは、短くとも恋人

と愛し合った彼女にとって、その扇は「女誠」操の扇である以上に「蓮」恋の扇でもあったからだろう。謡曲『班女』には、

形見の扇より、なほ裏表あるものは、人心なりけるぞや

という句があるが、この扇も表の柄と裏のこととは、それぞれの意味で二人の女の心に寄り添っていたのである。

### 蛾のメタファー

廢屋で聴いた女の声は、果たして死霊の声だったのか、「私」と世外民の二人はそれを確かめるために再び禿頭港の廢屋を訪ねた。幽霊にも、幽霊の正体にも遭遇することはなく、黒檀の立派な寝台を見出したばかりだったが、「私」はその下に落ちている扇子をみつけ、ポケットに収める。世外民の方は、大きな紅い蛾が寝台の上へ出てくるところを見たと言うのだが、「私」はその蛾を目にすることはなかった。

これは一体どういうことなのだろうか。なぜ、蛾は世外民にしか見えなかったのか。果たしてその蛾は実在のものだったのか、あるいは狂女の化身でもあったのだろうか。しかも、この食い違いがまるで蛾が扇に変身したかのように聞こえ、謎を残す。

蛾は蝶に似ているが、漢詩文に蛾が詠われることは、蝶とは比較

にならないほど少ない。ひらひらと飛ぶ蝶は魂のイメージでしばしば用いられ、このくんだりも蝶であっても良かったように思えるが、敢えて蛾を配したことは、やはりそれなりの意味があるからだろう。

まず、蛾は古来より美女と結びつく。たとえば、『詩経』衛風の「碩人」に

手如柔荑 手は柔かき荑の如く

膚如凝脂 膚は凝れる脂の如し

領如蝤蛸 領は蝤蛸（白く細長い虫）の如く

齒如瓠犀 齒は瓠の犀の如し

螭首蛾眉 螭の首に蛾の眉

巧笑倩兮 巧笑倩たり（あかぬけて）

美目盼兮 美目盼たり（すすやか）

とあるように、「蛾眉」は美人の眉に喩える語として頻繁に用いられる。その由縁には諸説あるのだが、蛾の触角のように美しい形であるからだとか、蛾が羽を広げたように描かれたからだというものもある。「蛾」と「娥（あかぬけた美女）」とで音義が通ずるからというものもある。いずれにせよ、蛾が美女を連想させることに変わりはない。

さらに、蛾には身を滅ぼすというイメージがある。詩に蛾の語が

用いられるのは、前に述べた「蛾眉」の例が圧倒的に多いが、蛾そのものが詠まれる場合には、しばしば「燭蛾」「火蛾」などという形で、火に近づいて己が身を燃やしてしまう存在として描かれる。

燭蛾

(唐) 孟郊

灯前双舞蛾 灯前 双なまび舞ふ蛾

厭生何太切 生を厭ふこと 何ぞ太はなはだ切なる

想爾飛來心 想ふ 爾の飛び來たる心

悪明不悪滅 明をにく悪み 滅ぶるを悪まず

天若百尺高 天 若し百尺の高ならば

応去掩明月 応に去きて 明月を掩ふべし

この破滅的なイメージは、狂死した沈家の娘にも当てはまるが、縊死した恋人のあとを追って自殺した逢曳の女により似つかわしい。

江戸後期の文人画家、田能村竹田（一七七七～一八三五）に「恋花帖」（二八一一年、出光美術館所蔵）という画帖がある。中国の画人張御乗の筆使いをまねて描いたものというが、その中に、蛾の自画賛が二点収められている。まずその一つには、一二・二×一一・五センチの画面いっぱい羽を広げた蛾が描かれ、

化羅君分疏葉 羅に化するに 君は疏葉を分かつ



同右、薄命多情



田能村竹田「恋花帖」化羅君分疏葉  
(['没後180年田能村竹田』展図録、出光美術館、2015年)より転載

という自賛がつけられている。ひとひらの羽翅はねを切り取って、うす絹へと変身するという意である。もう一つには少し小ぶりの白い蛾が描かれ、

薄命多情 命薄くして情多し

との自賛がある。はかない命を多情に生きるという意である。

うす絹に変身するという蛾は、扇に変身する蛾に、薄命多情の蛾は、恋に身を滅ぼした二人の女にびたりと重なる。佐藤春夫が竹田の「恋花帖」を見たとは考えられないが、蛾の連想させるイメージが共有されていたと理解すべきなのであろう。

### 「君夢我時我夢君」

最初の廃屋訪問と二度目の廃屋訪問との間に、「私」の台湾での「唯一の友人」世外民とのエピソードが挿入される。伝統的なエリート階級の出身である彼は、「私」との別れを惜しんで、一首の漢詩を賦した。

登彼高岡空夕曛 彼の高き岡に登れば 夕曛空し  
天辺孤雁嘆離群 天辺の孤雁 群を離るるを嘆く  
温盟何必酒杯 盟を温むるに 何ぞ酒杯を必ずとせざらん

君夢我時我夢君 君我を夢むる時 我君を夢む

まず、この詩を解釈してみよう。起句の「彼の高き岡に登れば」という表現は、「登」の字は異なるが、『詩経』小雅「車轄」や周南「卷耳」に見える「陟彼高岡（彼の高き岡に登れば）」と重なる。よりポピュラーな「卷耳」の方の第三章を見ると、

陟彼高岡 彼の高き岡に登れば

我馬玄黄 我が馬は玄黄

我姑酌彼兕觥 我 姑らく彼の兕觥に酌み

維以不永傷 維れ以つて 永く傷はず

高い山に登ると、私の黒い馬も疲れて黄色くなってしまった。とりあえず盃に酒をくんで、いつまでも悲しむのはやめることにしよう、という意である。「登高」高い丘に登るといふのは、九月九日、重陽の節句にうち連れて小高い丘に登り、互いの平安を祈る行事として知られている。これは秋の詩であるから、重陽の登高だと考えることもできるが、そうである必要もない。何時の登高にせよ、高いところに登って抱く感懐というものは古来、別離や老い、異境にあるなどの理由で孤独が歌われるというのが、お決まりである。この「卷耳」詩は、朱子の注に従えば、旅に出た夫を想う妻の歌ということになる。これから遠く離れる親友の「私」に送る詩としてふ

さわしい歌いだしだろう。続く「夕曛空し」はあまり熟さない表現である。見渡す限りひと気もなく、ただ残照ばかりというのであるう。

承句の「群れを離るるを嘆く」「孤雁」もまた、友を失う悲しみを表すとともに、秋のモチーフでもある。雁は渡り鳥なので、旅人の比喩となるが、そうすると「孤雁」は「私」ということになるうか。転句の「何不必」は、あまり上手い表現ではない。これらの語を使う場合には、「何不（何ぞ……せざる）すなわち」……しようではないか」とするか、「不必（必ずしも……せず）すなわち」……する必要はない」とするかのとちらかで、この二つを組み合わせてもちいることなど詩ではしない。もって回った表現というよりもむしろ、意味が分散してしまう。強いて訳せば、「どうして酒を飲む必要などないとするのか」つまり、「いつかきつと酒を酌み交わして旧交をあたためよう」との意となるう。さらに言えば、「温盟」も詩に見られる表現ではない。本文には、

——あまり上手な詩でもないさうだが、私にはそんなことはどうでもいい。

とあるが、あなたが謙遜でもなく、こうした表現の生硬さを自覚していることなのかもしれない。

さて、この詩の眼目は何と言っても結句にある。「君我を夢むる

時 我君を夢む」——君が私のことを夢に見ているときには、私も君の夢を見ているよ——と、魂の交感を唆して締めくくる、この結句は非常に印象的だ。佐藤はこの表現をどこから思いついたのだろうか。宋・蘇軾の填詞に「蝶恋花 暮春別李公擇（蝶恋花 暮春李公擇に別る）」という作があるが、その後関は、

路尽河回人转舵 路尽き 河回りて 人舵を転ず

繫纜漁村 繫を漁村に繫げば

月暗孤燈火 月暗く 燈火孤なり

憑仗飛魂招楚些 飛魂に憑仗りて 楚些を招く

我思君処君思我 我君を思ふ処 君我を思ふ

というものである。舟で去り、孤独な夜を過ごしている君の魂を、楚辞の招魂のように呼び戻したい。世外民の送別詩の結句は、この作の末句「我思君処君思我」とよく似ている。蘇軾の詞も友人との別れを惜しみ、魂の交感を歌ったものであるから、これを踏まえた表現と見るには無理が無い。しかし、やはり「君を思ふ」と「君を夢む」とでは、表現においても、意味においてもいささかの懸隔がある。

佐藤と同時代、大陸で活躍した文学者に顧随（一八九七—一九六〇）がある。日本ではあまり知る人は多くないが、中華民国時代から活躍した文学者として屈指の存在である。この顧随の作に「君夢

我時我夢君」つまり、世外民の詩の「君」と「我」を入れ替えただけの表現が見える。しかもこの句は意を得たものと見えて、顧隨は二度も用いている。

蝶恋花（一九二八年作）

顧隨

飛絮隨風蟻軋磨 飛絮 風に隨ひ 蟻軋磨す（うるたえる）

心向江南 心 江南に向かひ

身向床頭卧 身は床頭に卧す

我夢君時君夢我 我君を夢むる時 君我を夢む

夢魂中道還相左 夢魂 中道に 還た相左ふ

（後関略）

鳳棲梧（一九二八年作）

顧隨

我夢君時君夢我 我君を夢むる時 君我を夢む

歩踏黃華 歩みて 黃華を踏めば

相遇秋江左 秋江の左に相ひ遇ふ

情緒安排猶未妥 情緒 安排するも 猶ほ未だ妥かならず

（後略）

自ら題注に示すごとく、ともに一九二八年の作で、この時三十二

才。天津女子師範学校で教えつつ、填詞集を出版している。顧隨は唐宋代の詩詞の研究者であるから、蘇軾の「我思君処君思我」をヒントに「我夢君時君夢我」を思いついた可能性は充分にある。まず、どちらも詩でなく、填詞であること。第二に、顧隨の二首中の一首が「蝶恋花」で、蘇軾の作と同じ詞牌であること（填詞は、もと歌謡の替え歌であるため、「題」ではなく原曲の曲名で表す。それを詞牌という）。第三に、「我」と「君」の語順が、蘇軾の作と一致する。

しかしながら、世外民の送別詩の結句と顧隨の句がかくも一致すること、しかも両者の制作時期が極めて接近していることから、この両者を全くの無関係とみなすことも難しい。蘇軾の当該句の追隨作はもとより、「君夢我」「我夢君」を組み合わせた句が、世外民の詩と顧隨のもの以外には、管見の限り見出し得ない。漢詩は、モザイクのように既存の詩語を組み合わせて作るものであるが、それにも拘らず（そして二千数百年の歴史がありながら）、全く影響関係（間接的なものを含め）もなく、たまたま表現が相似していたなどという例は殆どない、という文芸なのである。

ここで、一つずつあり得るケースを検討してみよう。

まず、先行する佐藤春夫作・世外民の送別詩を顧隨が見た可能性はあるか。顧隨は、日本文学に興味を持っており、一九二七年に魯迅訳の日本小説を読んでいる。おそらく、一九二三年に周作人が魯迅と共訳した『現代日本小説集』（商務印書館刊）所収のものであ

ろう。ここには、佐藤春夫の「私の父と父の鶴との話」や「たそがれの人間」、「形影問答」、「雉子の炙肉」も収められているが、中国語に訳されていない佐藤春夫の作品まで読んだ可能性は、皆無ではないが低い。よしんば読んでいたとしても中国の一流学者にして填詞作者である彼が、「域外」（朝鮮、日本など中国から見てもその地域をさす用語）で作られた詩を取り入れるとは考えられない。表現を踏襲するとは、敬意を伴うものであるからである。

それでは、顧隨の作を佐藤春夫が使った可能性はあるか。これは、製作年次から見て、あり得ない。

とするなら、考えられるのは、「君夢我」「我夢君」を含む作Xがあり、顧隨も佐藤春夫もその影響を受けたということであろう。Xは、詩詞でなくとも、小説や演劇中の表現ということもあり得る。無論大陸で作られたもので、製作もしくは発表が、一九二〇年代というところであろう。一九二五年頃ではあるまいか。もしもそうであるとするれば、初出時にはなかった世外民の送別詩を一九二六年の再発表時に急遽挿入した理由がつく。その場合、佐藤に情報を提供したのは誰だろうか。有力な候補としては、一章で言及された田漢（二頁）が挙げられる。

## 世 外 民

世外民という名は、その男のペンネームである。裕福で高いイン

テリジェンスを持つ家柄、つまり儒学と詩文を究めた伝統的なエリート階級の人間として造型されている。

彼は台南から汽車で一時間行程の亀山の麓の豪家の出であった。家は代々秀才を出したといふので知られてゐた。

この「秀才」というのは、今でいうところの「学問のよくできる人」という意味ではない。「秀才」の語には、「読書人」すなわち知識人の意もあるが、「生員」すなわち、科挙の最初の試験に受かって郷試の受験資格を得た者の意が本来である。林淑美「清代台湾移民社会と科挙受験秩序の構築」<sup>12)</sup>によれば、清代に中国本土の人が台湾に移住したのに伴って、台湾でも科挙が行われるようになった。「省」ごとに挙人（郷試に合格したもの）の定員数が設定されるところを、台湾は「府」でありながら一枠として設定され、さらには例外的に進士枠も設けられた。「全国レヴェルの会試で福建省の読書人層と実力で勝負すれば、進士資格の獲得は到底無理であった」からである。このような清朝による台湾の科挙制度への配慮にもかかわらず、その想定どおりに事は進まなかった。台湾を優遇すれば、それだけ福建から台湾へ渡って科挙を受ける者が増え、結局台湾における合格者が、中国本土の出身者に大半占められてしまったのである。

逆に考えれば、「代々秀才を出した」という文意は、世外民の家

が台湾人としては数少ないエリート家庭の出であったということの意味している。しかし、台湾は一八九五年から日本に統治されるようになり、清朝もまた一九〇五年九月に科挙を廃止するにいたった。さらに、四書五経や漢詩文の知識など無用の長物、むしろ近代化を妨げる悪弊と認識される方向に進む。世外民は、「士大夫」として世に生きるという人生を奪われた者であり、一種の高等遊民として生きざるを得なかった者なのである。

一章に記された通り、日本統治期においても詩社は當まれ、漢詩文を固有の文化として守る知識人は存在した。しかし、その一方で、佐藤春夫が台湾に滞在した一九二〇年は、後から見るとメルクマールとなる年であった。台湾において新しい文学への転換が叫ばれ始めたのである。

一九二〇年七月、陳炳が「文学与職務」を『台湾青年』創刊号に発表し、「旧文学を批判して、科挙の悪習の影響を受けており」文章はあつても作用はなく、学術はあつても思想はない」と述べた。彼らが起こした「新文学運動」が勧める文体は「白話文」すなわち口語文である。白話文で書かれた『台湾民報』が一九二三年四月に創刊され、大陸の作家、胡適の著作も転載された（彭瑞金「戦前台湾社会運動の発生と新文学運動の始まり」<sup>13</sup>）。そのほか、一九二〇年代には雑誌で「日用文鼓吹論」「論普及白話文的新使命」「漢文改革論」など伝統的な漢文を改める必要性が激しく叫ばれたのである。<sup>14</sup>

佐藤は、一九二〇年の台湾のこうした一面も目の当たりにしたで

あろう。また、『女誠扇綺譚』が執筆されたのは、一九二五年。同年の『台湾民報』には張我軍の「詩体的解放」などの論文が掲載され（四七〜四九号）、漢詩を否定し自由詩を称揚するなど、新文学運動は最盛期を迎えていた。ところが、『女誠扇綺譚』の時計は一九一七年前後に合わされている。和泉司によれば、本文中に

この二三年後に台湾の行政制度が變つて台南の官衙でも急に増員する必要が生じた時

とある、この行政制度の改変が一九二〇年の地方自治制度改正に当たるといふ（『日本統治期台湾と帝国の〈文壇〉——〈文学懸賞〉がつくる〈日本語文学〉』ひつじ書房、二〇一二年）。佐藤春夫は、一九二〇年代から勃然として起こった台湾文壇の動きを知っていたはずである。しかし、敢えて時間をずらして『女誠扇綺譚』を作った。それは、世外民を伝統的漢文脈に生きる人として描く必要があるからではないだろうか。世外民は「反抗の気概」を持った硬骨漢である。「統治上有害」ともみなされる発言をばからない若者である。一九二五年という時間で彼を伝統的知識人として描いたならば、むしろ、新しい文学の思潮にも抗する人という別の色合いが付与されてしまう。それは批判者としての世外民の立場を微妙に変えてしまうことになりはしまいか。

「世外民」ということは、「世外人」とほぼ同義である。「世外」

とは俗世の外。「世外民」という語を詩に見ることはできないが、「世外人」であれば、たとえば、蘇軾の「題盧鴻一学士堂図（盧鴻一の学士堂の図に題す）」詩に

方為世外人 方に世外の人と為る

行止何須録 行止（ふるまい） 何ぞ須らく録すべけんや

というような例を見出すことができる。浮世の俗事に煩わされることのない世界に住む人間。しかし、それは求めたものではなく、そうならざるを得なかった人物としての世外人＝世外民であったのではないだろうか。

ただ、「世外」にあるとは、「世」との関係を絶ち切ってしまうことではない。仕官するだけの能力がありながら仕えていないものを「布衣」と呼ぶが、敢えて仕えず「布衣」としての道を選ぶのも、一つの政治的な姿勢と理解するのが、中国の儒教道徳における通常の理解である。「世外民」のペンネームもまた、決して風狂の人にあらざり、批判者としての姿勢を示すコードだったと言えるだろう。

民族的絆を固めるため、あるいは、植民地統治を進める上での「価値」があったとしても、かつて述志の手段として文芸の上席を占めていた漢詩はその席からすべり落ち、存在の意義が変容しつつあった。「私」と世外民の絆は、漢文脈を通しての共感、理解で結

ばれていたが、世外民は一九一〇年代末の読書人として、その岐路に立っていたのである。

#### 註

(1) 河原功「日本人作家の見た台湾原住民―中村古峽と佐藤春夫」(山口守編『講座 台湾文学』国書刊行会、二〇〇三年、第2章)に詳しい。

(2) 田漢は一九一六年から一九二二年まで、一八歳から二四歳までを日本で過ごした。東京高等師範学校で学びつつ、演劇に目覚め、社会運動にも参加。佐藤春夫「人間事」(『中央公論』一九二七年一〇月)は、留学を終えて帰国した田漢が、一九二七年六月に短期で来日し、佐藤春夫宅に滞在(六月二六から二九日)したときのことを記しており、二人の深い交流を示す。郁達夫とも面識があった。台湾の置かれた状況の理解は、こうした交友からも深まり、それが作品に反映されていたと思われる。しかし、日中戦争が始まって後、戦時下における佐藤春夫の中国観は、急速に国家が提示するそれと重なり合っていた。

(3) 『台湾新聞』は、一九四〇年一月一日(二三三四九号)から一九四四年三月三十一日(一四七八九号)までマイクロフィルム化されている。それ以前のもものは、東京大学の明治新聞雑誌文庫に一部収蔵されているが、目指す一九二〇年のものはないのである。大正年間だと一九一四年から一九一六年の一部が存在する。日台交流センター所蔵の『台南新報』(マイクロフィルム)も一九二一年五月からである。

(4) これについては、河原功『台湾新文学運動の展開』(研文出版、一九九七年、一六頁)に、林猷堂と林熊徴の違いが述べられている。林猷堂はこの直後から、台湾文化協会の設立(一九二二年一〇月)や台湾議會設置運動(一九二一年から一九三四年)の中心的存在として活動を始めていく。この「植民地の旅」には、案内人のA君が台湾屈指の富豪である林家の由来を語るところがある。乾隆七八年頃、漳州から同族を率いてこの地にやってきて二百年経つというが、「名高い家柄だけに何かと言ひ

触らされたものが広く伝はつてゐるものと見える。僕は後年安平港に取材して拙作女誠扇綺譚といふのをものしたが、このときA君から聞いた話もその一部分に取入れた」とある。「女誠扇綺譚」執筆時、林猷堂のことが頭にあつたとすれば、「殖民地の旅」にあつた台湾人の置かれた状況の認識もともにあつたと考えてよい。また、名望家の林猷堂も、その力の背後に弱者を力で搾取した家の歴史があるはずだとするならば、「女誠扇綺譚」中の、沈家の祖に殺された女性のすがたにそれを見ることができらる。

(5) 矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』（岩波書店、一九二九年）の第一篇三節の「林本源製糖会社」の注に、「林本源家は台湾在来の豪族にして領台当時動乱を避けて二、三百万円を上海の香上銀行に預金したといふ。然るに総督府は之に勧めその資金を台湾に移して製糖会社を設立せしめ（明治四十二年）、而して糖務局及台湾銀行より人を入れて経営に当らしめた。遂に昭和二年塩水港製糖に合併せらる」とある。

(6) 台湾史研究家の戴寶村は、「移民台湾：台湾移民歴史的考察」（台湾月間双月電子報 二〇〇六年八月号 <http://subpage.fpe.gov.tw/web-life/taiwan/9608/9608-14.htm>）2016年11月10日ダウンロード。この記述は李明珠他編『台湾史十一講』（国立歴史博物館、二〇〇六年二月）に収録）において、一九二六年の調査で福建人（閩南語使用）について「泉州人比較多是在住靠海線の西南沿海地方、漳州人の居住地則比較靠内陸地方」「在福建人的百分之八十三點七裡面、泉州人佔了百分之四十五、漳州人佔了百分之三十五」と述べている。ここでは泉州人と漳州人の差異について論じているが、特に廈門についての言及はない。廈門の人はおそらく漳州人の一部と認識されている。また、実情は佐藤春夫の認識と少し異なり、漳州人より泉州人の方が多かったとされている。

(7) 磯村美保子「佐藤春夫の台湾体験と『女誠扇綺譚』——チャイニーズ・ブネスの境界と国家・女性」（『金城学院大学論集 人文科学編 第2巻第1号』二〇〇五年九月）は、この小説に、「私」と世外民、「漢文と日本語」「泉州語と台湾語」「沈家の娘と下婢」などの二重性を見出し、「台湾

が体現するチャイニーズ・ブネスの境界、そこに生きる女性の問題について考察」している。また、河野龍也「言語体験としての旅——佐藤春夫の『台湾もの』における「越境」「跨境」第3号、二〇一六年六月）では、佐藤春夫が「異文化理解の可能性や、植民地の社会構造を、「言語」という切り口から考えていった形跡」を追っている。

(8) 藤井省三「清末—一九二〇年代の台湾文学——「世外民」世代にとっての漢詩と日本語」（『講座 台湾文学』国書刊行会、二〇〇三年、第1章）中に示されたデータによる。

(9) 市川桃子「中国古典詩における植物描写の研究——連の文化史」（汲古書院、二〇〇七年）に「連」は「憐」の「諸音相関語」として、恋を歌うハスの詩の系譜が論じられている。また、佐藤春夫の『車塵集』には、明・端淑卿の「採蓮」の訳詩が見える。

(10) 顧隨の事蹟及び作品の制作年については関重撰『顧隨年譜』（中華書局、二〇〇六年）による。

(11) 両作とも本文は『顧隨文集』（上海古籍出版社、一九八六年）による。

(12) 林淑美「清代台湾移民社会と科挙受験秩序の構築——特に閩・粵関係をめぐって」、『NUCB Journal of economics and information science』五〇（一）、二〇〇五年九月。

(13) 下村作次郎・藤井省三、中島利郎、黄英哲編『よみがえる台湾文学——日本統治期の作家と作品』（東方書店、一九九五年）所収。

(14) 中島利郎・河原功・下村作次郎編『日本統治期台湾文学 文芸評論集』第一巻（緑蔭書房、二〇〇一年）所収。

(15) たとえば、神楽岡昌俊『中国における隠逸思想の研究』（ペリカン社、一九九三年）には、唐代までの隠逸思想の分析がなされ、「社会批判、政治批判」としての「逸民」のあり方が述べられている。

※佐藤春夫の作品の引用は『定本佐藤春夫全集』（臨川書店、一九九八—二〇〇一年）により、漢字は通行字体に改めた。